

ひとりの被災者として

山田 栄克

ひとりの被災者として

今回は口承文芸の研究にたずさわるものとしてではなく、直接的ではないのですが、一被災者として経験したことなどを話していきたいと思います。私のふるさととは宮城県東松島市で、市街地の六〇パーセントが今回の津波で浸水したといわれるほど津波の被害があつたところです。

私が生まれ育つたのは、この東松島市の野蒜（のびる）です。この野蒜には海水浴場があり、夏には海水浴客が多く訪れました。私も毎年のように海水浴にいらしてました。また野蒜は塩田を住宅地にしたところも多いのですが、津波後、塩田をやつていたころの風景に戻ってしまった、と父が申しておりました。

野蒜というところについて、あまりお聞きになつたことがない方も多いと思いますが、JR仙石線の電車が津波にのまれて、くの字にまがった映像を御覧になつた方は多いのではないかと思います。これはまさしく私の実家の近くです。この電車に乗っていた人たちは皆、助かつたということなのですが、この東松

島市全体では、死者が一〇〇人以上にのぼっています。私の祖母も、この津波で亡くなりました。私自身は、大学進学のためには上京するまでの十八年間、ここで過ごしました。この東松島市野蒜で起こつたことについてお話をします。

つながらない電話・情報の空白

震災直後、私はあわてて実家に電話をしたのですが、なかなか電話はつながらず、何回も何回もしつこく、それこそ十回と電話をしました。やはりつながりませんでした。そこで固定電話ならつながるかもしれないと思つて見知らぬお宅にあがつて電話を使わせてもらつたのですが、それでもつながらず、テレビを見させていただきました。そこで、津波が来ているというニュースを目にし、あきらめずに電話をし続けたところ、どうにか母に電話が繋がりました。母には、「津波がくるから逃げて」と申しました。そのとき実家が野蒜は、停電になつておりましたので、テレビなど電気を使つて情報を手にいれる手段がありませんでした。ですから母も私の電話であわてて逃げたそうです。その後、公民館に避難したというメールがありました。それが、それ以後、数日間、連絡が途絶えます。

この東松島市は、被災状況を伝えるテレビでもそれほど取上げられることはなく、それほど被害はないのではないかと、どこか楽観視していたところがあつたのですが、現実はそうではありませんでした。二日目に、仙台に住んでいる兄から連絡が

あり、兄が無事だということがわかりました。ただ両親についてはまだ安否が不明でした。

三日目に、母の知り合いだという男性から、両親が無事だという連絡がありました。ただ私の母が、そろばん教室で教師をやっていた関係で「山田先生」とだけいつていたため、母だという確証を得たいと「本当ですか、名前は？」と確認したかったのですが、そこで電話が途切れてしまいました。それが三日目でした。そこで、助かったかどうかというのは、まだはっきりとわからない状況でした。

五日目によくやく兄がタクシーで、両親のところに向かいました。本当は自分の車で迎えに行きたかったのですが、ガソリンが手に入らず行けませんでした。私の実家は、まだ家の形を保っていたので、モノはだいたいいちにあったのですが、一階部分は瓦礫がおしよせて、モノが散乱している状況だったそうです。我が家のモノなのか、他家のモノなのかというのはまったくわからない状況でした。そのときは「祖母は亡くなったけど、両親は助かった」と考えたんですけど……私を幼少期からかわいがってくださったお年寄りもほとんど亡くなってしまいました。

とりあえず、その震災から、両親と連絡がつく五日間、この五日間というのは、本当に一人では耐えがたかったのですが、知り合いや友人と連絡をとりあいながら支えられながらどうにか過ごしておりました。

情報が入らないことへの不安、あの気仙沼の火災の状況などをニュースで見えていたから、あんなことが野蒜でも起きていたのではないかと最悪のことを考えてしまいました。なぜ東松島市の情報だけが入らないのか、某放送局のヘリコプターからの中継も、松島まで映してもうすぐで東松島市だということと、ここでスタジオに戻り、中継に戻ったら石巻市まで行ってしまっていました。どうして東松島市だけとはされるのだろうか、被害が無かったのだろうか、それとも、友人が言っているように、被害があまりにもひどかったから映せないのか……、そういった心配がずっとありました。

母は、私の電話から兄に助けだされるまでの五日間の記憶がない、といって、しばらくしてから、何があったのかを知りたがって、震災関係の本を読んでもりました。

まるで知らないところの風景

そして私が仙台に向かい野蒜を訪れたのは、三月二十五日、高速バスが復旧したときでした。

津波にやられた故郷の風景を見ても、悲しさというよりも、知らないところに来たような、「なんだろう、ここは」というような思いがこみあげてきました。私は、波にのまれながらも自宅に残ったアルバムから何枚かの写真をとって、東京にもどってまいりました。その後、もう私の両親は仙台の兄のところに行っていたのですが、まだ避難所にいる方々がたくさんいらっ

しゃいましたので、実家で無事だった使えそうなモノを持って
いきました。その時はもう、生活に必要な最低限な物資はそろっ
ていましたので、喜ばれたのは、漫画本や電氣を使わずに遊ぶ
ことができる玩具などでした。

六月に百ヶ日の慰霊祭が行なわれましたので、また六月十八
日に、東松島市のほうに戻りました。この合同慰霊祭に出席し
て、葬式に参列できなかった祖母に手を合わせることにしまし
た。その帰りにまた野蒜に寄りました。

公民館のこども神輿のすがた

この合同慰霊祭の頃にはだいぶ瓦礫も片付けられておりまし
た。公民館に行ったところ、神輿が救出されて置かれているの
を目にしました。これは近くの海津見神社という神社で五月の
祭で子供たちが担いでいた神輿です。それがボロボロになっ
ていましたが、救出されていました。その神輿を見たときに、こ
こには「震災前」の日常というものが確かにあったということ
を、改めて実感し、震災前にあった日常を記録したい、どんな
生活をしてきたのかを記録にとっておきたい、そういう思いが
私の中にこみあげてきたのです。これは社会的な意義とかとい
うより、むしろ私の自己満足に近いのですが、震災前の暮らし
民俗誌を編みたいという思いが強くなってきました。それを受
けて両親と私の記憶をもとに民俗誌を書きました。

八月には、私の実家があったところは更地になっていました。

家が解体されてしまったのを見て、悲しさよりも、ここに家が
あったのか、こんな狭いところに住んでいたんだ、というよう
な、「すがすがしい」という言葉は変かもしれませんが、そん
な気持ちがありました。

その際、周辺を探索していて気になったのが、「がんばっぺ、
がんばっちゃ、おらだちも 野蒜民一同」という張り紙でした。
こういった言葉は今ではもう使っている人がほとんどいない言
葉です。また「野蒜民一同」ですが、野蒜には亀岡や東名新町な
どの字があり、亀岡ならば亀岡区民というように字名は使って
いましたが、野蒜区民という言い方はしていませんでした。これは
集落を出た人が多くこれまでの地区では助け合うにも人数が少
ないため、もっと広い地域で助け合って頑張ろうという意味なの
か、それとも他の意味があるのか（例えば野蒜に今でも住んでい
らっしゃる方は、経緯は知らないが「野蒜」と「伸びる」がか
けるのではないかということをおっしゃっていました）は分か
りませんが、自分たちの集落の捉え方に変化が生じております。

何があったのか知ろうとする人たち

シヨッピングモールの写真展

震災から一年後の「三・一一」に慰霊祭があったので、それに
参列し、その二日後の十三日には、隣の石巻市に行ってきました。
石巻も、もう瓦礫は相当撤去されていたのですが、まだ家がひっ
くりかえって、放置されているところもありました。

その後、石巻のショッピングモールに行ったところ、エスカレーター横のスペースを利用して、あの日に何があったのかについてのパネル写真とその解説が展示してありました。そこにあったのは、「こういう感動的なことがあった」や「こうやって救出された」というようなものではなく、ただ火災の様子だとか、波がここまで来たという事実でした。そういったものを見たくない人が多いだろうとお思いの方は意外に思うかもしれませんが、そういったパネルを見る人は途切れることなく、それらを真剣に眺めていました。

また、震災後に様々な方々に会って話をうかがってききましたが、その都度、話になるのは、あの日、自分がどんな体験をしたのかということ。これは自分の辛さを話して共感してほしいというものではありません。私の母なども共に津波から逃げ切った方々と会った際には、あの日、あの時なにかあったのかということが話に出てくるそうです。

私の両親をはじめ、被災者は、あの日に何があったのかを知りたがっているということだと思います。今でも仙台の書店には震災関係の書籍が並んでいることからそのことがうかがえます。これらは震災と向き合い、自分自身の気持ちを整理しているように思います。

帰る場所がなくなったという実感

津波をうけて、私が育った家も歩いた道も周辺のお宅も変わ

り果てて、また私の成長を見守ってくれていた方々もほとんど亡くなってしまいました。そしてこれらは私の帰る場所も無くなってしまったという思いが生じてきました。これは震災直後ではなく、両親の安否が確認されてよかったという思いから、しばらく経ってから、生じてきました。今だからこそかもしれないですが、もう帰る所はあそこではない、と言いつけられることが多くなってきました。

それとともに、ともかく両親が助かったのだから実家から持つて帰るモノは無い、という思いから、あれも持つて来ればよかった、これも持つてくればよかったという思いへ変わってきました。たとえば、中学入学の際に祖母からもらった時計です。震災まで電池が切れた状態で自宅の机の中に置いたままでした。ふと失ったものを思い出すとき、この時計のことが頭をよぎることがあります。これは惜しいことをしたという思いではなく、この時計を思い出すとき、入学を喜ぶ祖母の笑顔が蘇ってくるからです。その他、ランドセルや茶碗、コップなど葉山氏の話ではありませんが、それらには一つ一つに思い出という物語がありました。

話を聴くということ

では、これからどういったことをしていかなければならないのか、ということ、あくまでも被災者という立場から考えてみました。これからは難しいことを考えずに、まずは被災地に行っ

てみてください。そして気をつかって震災のことやそれを連想することを避けるのではなく、その人が経験した震災を聞いてあげてください。話すことによって、その方々の記憶というものも整理されますし、そういうったことが必要なのだと思います。

私自身もこの例会で話をするまでは、できる限り震災の話はしないようにしていました。それは、私自身が間接的な被害者であり、私よりも辛い思いをしている方々がいると思っていたためです。ですから心に閉じ込めて乗り越えようと思いました。しかし、震災からしばらくして週に何度か無くなった実家の夢などでうなされるようになりました。それが、例会で話をしてからうなされることもなくなりました。心に閉じ込めて乗り越えたつもりでも乗り越えられていなかったようです。先に被災者が話をして記憶を整理しているということも、正面から震災と向き合うことで乗り越えようとしているのだと思います。

それとともに被災地の現実というものを知ってください。だいぶ復興は進んだのだらうと思うかもしれませんが、まだまだ復興はすすんでいません。

被災地にいったら、「復興」や「復旧」という言葉は出ないはずです。私の住んでいた野蒜だって、今後どうなるのか、全く決まっています。国立公園にするという話があったり、ソーラーパネルを置いてみるという話があったり、そうした話が出ては消え、出ては消えて、時が過ぎていくのが現実です。

次に津波がくるようなことがあれば今度はすぐに波が到達し

てしまうというような危ない地域でも仮設住宅よりはいいと自宅を改修して住んでいる方々も、かなりいらっしやいます。そういう現実を見ると、今、被災してここに住んでいる方々が求めているというのは、十年後はこうなっている、二十年後にこうなっている、という理想ではなく、今をどうするかということなのではないか、と思います。それが今行くと、本当にわかります。被災者の方は明るいです。もう前を向くしかないから、明るくしている。それは復興にむけて、明るくしているのではなく、今を生きるために明るくしているんだということです。そうしないと、前にすすめないから。

そういうことを考えながら、では私に何ができるのか……。私にできることなんてほとんど、ありません。ですが、私の自己満足でもいいと思ひ、私の両親に聞いて民俗誌を残しました。それは短いものですが、『昔話伝説研究』三十一号に載せていただきました。ここに「震災前」の暮らしがあったことを書きとめておきたかったです。

被災地にいらっしやり、そこで話を聞いてください。言葉にすることで、被災者の方々は自分たちに何があったのかということを受け入れて震災を乗り越えられるという方も多と思います。

以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

(やまだ・ひでかつ／國學院大學大学院博士課程後期)